

### 研究展望(平成25年)

MIYAMOTO, Keizō / TAKEUCHI, Akiko / 石井, 倫子 / 表, きよし / 山中, 玲子 / TOYOSHIMA, Masayuki / 江口, 文恵 / 小林, 健二 / KOBAYASHI, Kenji / 豊島, 正之 / IKAI, Takamitsu / 高橋, 悠介 / ISHII, Tomoko / 竹内, 晶子 / 宮本, 圭造 / 伊海, 孝充 / EGUCHI, Fumie / OMOTE, Kiyoshi / YAMANAKA, Reiko / TAKAHASHI, Yūsuke

---

(出版者 / Publisher)

法政大学能楽研究所 / The Nogami Memorial Noh Theatre Research Institute of Hosei University

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

NOGAKU KENKYU : Journal of the Institute of Nogaku Studies / 能楽研究 : 能楽研究所紀要

(巻 / Volume)

41

(開始ページ / Start Page)

141

(終了ページ / End Page)

169

(発行年 / Year)

2017-03-31

## 研究展望（平成二十五年）

平成二十五年に刊行された能・狂言関係の単行本、および雑誌等に発表された論文を取り上げる。例年と同じく、単行本（江口文恵）、資料研究・資料紹介（表きよし）、能楽論研究（高橋悠介）、能楽史研究（伊海孝充・宮本圭造）、作品研究（石井倫子・山中玲子）、狂言研究（小林健二・豊島正之）、外国語による能楽研究（竹内晶子）に分類し、分担執筆を行っているため、全体を展望するというより個別の論の紹介が主体となっていることをお断りしておく。また、重要な論稿を見落とすなどの遺漏もあると思う。ご寛恕を乞う。

### 【単行本】

『狂言サイボーグ』（野村萬齋著。文庫判208頁。1月。文春文庫。五九〇年）

二〇〇一年に刊行された同名著書の文庫化。末尾に著者による文庫版あとがきと齋藤孝の解説が新たに加えられた。

141 『ドナルド・キーン著作集 第六巻 能・文楽・歌舞伎』（ドナルド・キーン著。菊判424頁。1月。新潮社。三〇〇〇円）

二〇一一年から続刊の著作集（全十五巻の予定）の第六巻に日本古典演劇に関する著作が集められた。三部構成で、主に「第一部 能」が能・狂言関連の論考。二〇〇一年刊の講談社学術文庫本を基にしているが、初出が英文だったこともあり、訳語などに若干修正がなされている。

『能を読む①観阿弥と翁 能の誕生』『②世阿弥 神と修羅と恋』『③元雅と禅竹 夢と死とエロス』『④信光と世阿弥以後 異類とスペクトル』（梅原猛・観世清和監修。天野文雄・土屋恵一郎・中沢新一・松岡心平編。A5判560～662頁。1月・3月・5月・8月。角川学芸出版。各六五〇〇円）

能を文学的に読むことをコンセプトに編まれた書で、四冊にわたり百番以上の作品を時代別に分け、すべてに新しい現代語訳が提示された。各冊とも三部に分かれており、「能を読む」に詞章と現代語訳、「能を解く」に論考、「能を聞く」に座談・対談を収める。

『カラー百科 見る・知る・読む 能五十番』（小林保治・石

黒吉次郎編。菊判320頁。2月。勉誠出版。三二〇〇円）  
能を初心者知ってもらったための入門書的作用の書で、多くの能面や、能図絵、舞台写真をカラー写真で掲載する。「あらずじとみどころ」では、十日間の五番立の番組という設定で、能の現行曲五十番を写真とともに解説する。随所に高津希和子による「能豆知識」を挿む。

『平成二十三―二十四年度国立能楽堂企画展示 観世文庫創立二十周年記念「観世文庫展」報告書』（国立能楽堂調査資料係編。A4版16頁。3月。独立行政日本芸術文化振興会）  
平成二十三年十二月から翌二十四年四月に開催された同名展示の報告書。高橋悠介「観世大夫家における世阿弥自筆能本―国立能楽堂「観世文庫」展を通して」および展示資料一覧、井上愛「〈千手〉作品研究―小書・郢曲舞をめぐって」を収める。

『狂言兄弟 千作・千之丞の八十七年』（茂山千作・千之丞著。宮辻政夫編。四六判296頁。5月。毎日新聞社。二二〇〇円）  
毎日新聞に平成十八年―二十年に連載された「千作・千之丞 泣き笑い兄弟80年」に改稿を加えて書籍化したもので、茂山千作・千之丞兄弟の出生から生い立ち、晩年にいたるまでが、本人の談話や家族らの証言をもとにまとめられている。くしくも四世千作逝去と同月の刊行となった。全五章のうち第一―四章は兄弟の活動を四期に分けて時代順に追う。第五

章「芸を語る」では作品について、若手に対する要望等を語っている。エピローグには両者の息子千三郎・七五三・千五郎・あきらの各談話を収める。『楽劇学』第二十一号に権藤芳一の書籍紹介が載る。

『能楽から見た中世』（脇田晴子著。A5判308頁。5月。東京大学出版会。五八〇〇円）

中世史を専門とし、芸能史や女性史の論考・著作を多数発表してきた著者による、能楽を核とした研究書。書き下ろしと既発表の論文で構成される。神能や夢幻能・物狂能・能の語りなど作品を基軸に考える論や、猿楽座の構成や組織についての論考が収められる。

『世阿弥の言葉 心の糧、創造の糧』（土屋敬一郎著。文庫判208頁。6月。岩波現代文庫。九六〇円）

プロデューサーで能楽評論家でもある著者の前著『処世術は世阿弥に学べ！』（二〇〇二年刊行）が、加筆・修正され文庫化。世阿弥の能楽論や作品中の言葉を手がかりに、世阿弥の考え方が現代社会でも通じることを丁寧に紐解く。

『からだで造る〈芸〉の思想 武術と能の対話』（前田英樹・安田登著。四六判258頁。7月。大修館書店。一八〇〇円）

自身も新陰流剣術を嗜む芸術批評家と、下掛宝生流能楽師の対談集。三部構成で、第一部は技術論・身体論や稽古論な

ど多岐に亘った内容。第二部は平成二十三年の東日本大震災を通して考えたことについて、第三部は俗曲師松山うめ吉・プロデューサー佐藤マサノリを交えて日本の芸や文化について語る。

『横道萬里雄の能楽講義ノート』【謡編】(横道萬里雄の能楽講義ノート) 出版委員会編。A5判192頁・CD付き。7月。檜書店。三三〇〇円)

前年に逝去した横道萬里雄の、東京芸術大学での講義の音源を書籍化したものの第一弾。「謡編」と題された本書では、能楽史や能の構造についての概説、吟型、地拍子についての講義がまとめられている。付属CDには講義の音源の一部を収録。横道氏自身が謡などの実演を交えながら解説している様子が窺える。翌年には第二弾の囃子編も刊行された。

『国立能楽堂開場三十周年記念特別展示 能を彩る文化財 名品能面能装束展』(田邊三郎助・長崎巖監修。国立能楽堂事業推進課調査資料係編。A4判77頁。9月。独立行政法人日本芸術文化振興会。二三八〇円)

同名の展示の図録。図版では各家・各機関から集められた展示された能面・能装束のカラー写真を収録。巻頭に監修者両名が能面・能装束の重要文化財について執筆するほか、小林彩子・菊池理子が能装束について寄稿する。

『能はこんなに面白い!』(観世清和・内田樹著。四六判272頁。9月。小学館。一八〇〇円)

二十六世観世宗家と武道家の対談集で、能の歴史や武道について語り合う。第一・二章は著者二名の対談、第三章に「能楽ワークショップ」では松岡心平を交えた鼎談で『松風』『山姥』について語る。

『日本人のこころの言葉 世阿弥』(西野春雄・伊海孝充著。新書判208頁。10月。創元社。一二〇〇円)

平成二十五年は世阿弥生誕六五〇年にあたるため、世阿弥関連の催しや新刊書籍が目立った。本書もその一つで、世阿弥の言葉と生涯についてまとめられている。前半の「言葉編」では、世阿弥の能楽論・能作品中の言葉を稽古・作能・演技・相伝の四カテゴリーに分けて解説する。後半「生涯編」は世阿弥の人生についての概説で、命日や幼少期、佐渡配流などにスポットをあてている。

『平成関西能楽情報』(権藤芳一著。四六判406頁。11月。和泉書院。三八〇〇円)

演劇評論家である著者が、『戦後関西能楽誌』(平成二十一年)に続き、能楽関連の評論を書籍化した。本冊には「現代能楽」「能楽ジャーナル」「能楽タイムズ」等に連載したものを収録する。平成以降の著作の集成だが、関西の能楽師の家の系譜や歴史について書かれているものも含まれ、能楽の

近・現代史としても有益な一冊である。

『謡曲(能)文学論考』(松田存著。A5判430頁。11月。新典社。一二四〇〇円)

能の作品を文学作品として捉えた研究で、作品が引用する和歌を手がかりにした論考が中心。『徒然草』と芸能や、近松、島崎藤村についての論考等も収められている。

『伊藤正義中世文華論集第二巻 謡と能の世界(下)』(伊藤正義著。片桐洋一・信多純一・天野文雄監修。関屋俊彦・稲田秀雄編集。A5判619頁。11月。和泉書院。一六〇〇〇円)

二〇〇九年に逝去した著者の論文集(全六巻)の第二巻。本冊には世阿弥能楽論や謡曲注釈書、謡本の研究についての論考を中心に収録する。

『世阿弥のこぼれ一〇〇選』(山中玲子監修。四六判164頁。12月。檜書店。一六〇〇円)

能楽師・能楽研究者・各界著名人らが、世阿弥の能楽論書・能作品から好きな言葉を選び、寄稿している。歌舞伎役者坂東玉三郎やバレリーナ森下洋子、武術研究家甲野善紀らも参加。

『うつぼ舟V 元雅の悲劇』(梅原猛著。四六判256頁。12月。角川学芸出版。二八〇〇円)

哲学者で能作も行う著者のうつぼ舟シリーズ第五冊。世阿弥の息男で早逝した観世元雅についての論考が作品研究を中心に展開される。著者作の新作能「世阿弥」のテキストも収録する。(江口)

### 【資料研究・資料紹介】

近年、能・狂言の絵画資料研究の進展にはめざましいものがあり、平成二十五年にはさまざまな絵画資料を取り上げた論考が発表された。まずはそれらを取り上げたい。

平成二十四年五月に法政大学で行われた能楽学会大会では「能・狂言の絵画資料」をテーマとする企画が行われた。『能と狂言』11(5月)にはその企画における四氏の講演とパネルディスカッションの報告が掲載されている。

小林健二「屏風絵に描かれた能―香川県立ミュージアム「源平合戦図屏風」をめぐって―」は、藤戸合戦を描いた屏風について考察する。香川県立ミュージアム所蔵の「源平合戦図屏風」は、右隻に一の谷合戦、左隻に藤戸合戦を描くが、この藤戸合戦が能(藤戸)を題材としていることを明らかにする。佐々木盛綱によって殺害された獵師の母親のほか妻子の姿が描かれるのは、ツレや子方が登場したかつての演出を留めており、家族に付き添う男はアイを示すとする。この屏風絵の作成には佐々木家の子孫がかかわっており、先祖の名誉の顕彰という意図が窺われることを指摘する。

泉万里「熊野絵巻と熊野絵本」は、能(熊野)を題材とする

行興寺藏「熊野絵巻」と国会図書館蔵「熊野絵本」を考察し、これらが作成された背景を考察する。どちらも稚拙ながら味わいのある絵に見えるが、絵画様式には大きな違いがあり、「熊野絵巻」は中世物語絵画の素朴様式と呼ぶべき表現方法や描き方を踏襲している。それに対して「熊野絵本」は本格的な絵画技法を習得した絵師によるもので、素朴様式で描かれてはいるが、人物や建物などは本格的な狩野派の流派様式がそのまま使われ、様式の混淆が見られるという。中世絵画の特殊な様式を明らかにする論考である。

小山弓弦葉「能絵鑑に見る能装束の様式―諸本との比較から導き出されるデザインの変遷―」は、工芸史の視点からの考察。まず能装束のデザイン様式の変化を説明し、それには当時の権力者や有力な能役者の影響が大きいことを指摘する。そして宇和島藩本・近衛家本・国立能楽堂本の三種の「能絵鑑」を比較し、描かれた能装束の特徴の違いから、三種は関連を持ちながら発展的に描かれたものであり、宇和島藩本が元禄期頃に成立し、それをもとに近衛家本が徳川家宣時代に作られ、さらにそれをもとに国立能楽堂本が作成されたことを明らかにする。元禄期の能装束に復古調のデザインが見られることなども指摘されている。

藤岡道子「絵画資料に見る江戸初期の狂言」は、狂言の絵画資料を、有名な筆者の狂言絵画、都市景観図の画中に描かれた狂言、狂言上演図(筆法や画面様式の違いからさらに三群に分ける)などに分類して具体例を紹介する。存在が判明

した狂言古図の関係を明らかにしつつ、曲名特定の問題や古図に含まれる謎などを指摘する。講演内容をほぼそのまま紹介するが、その後の自身の論考で明らかになったことや修正した点も注記されている。

同誌には四氏の講演後に行われたパネルディスカッションも収録されている。小林健二が他の三氏の講演の重要な部分について確認・質問をした後、会場からの質問に答えている。取り上げられた絵画資料に対する異なる見解が示され、新たな資料の存在が指摘されるなど、絵画資料を用いた研究がまだ発展の余地を多く残していることが感じられる。

この能楽学会の企画は創立六十周年を迎える法政大学能楽研究所との共催で行われ、法政大学で「能・狂言を描く」という展示が行われた。この展示でのキャプションを生かしてまとめられたのが宮本圭造「能・狂言と絵画―描かれた能・狂言の系譜―」(『能楽研究』35。3月)である。ここでは能・狂言の絵画を6種に分けて説明する。芸を伝えるための絵画では「二曲三体人形図」や「八帖本花伝書」などを、役者の面影を記憶する絵画では「宮増弥左衛門画像」などを、風景の一つとして演能を描く絵画では寺社参詣曼荼羅や洛中洛外図を取り上げる。能・狂言の舞台を描く絵画では三種の「能絵鑑」を詳細に比較する。能の興行を記録する絵画では「弘化勸進能絵巻」など、能の物語を描く絵画では「熊野絵巻」や「謡曲画誌」などが紹介されている。多くの図版が使われた六十ページを超える詳細な論考で、展示を楽しむよう

に読むことができる。また、能・狂言絵画研究の現状を把握するにも最適なものである。

能楽学会で講演をおこなった藤岡道子は、『能と狂言』のほかにも論考を発表した。「狂言の絵画資料の考察―国立能楽堂収蔵品を中心に」（『国立能楽堂調査研究』7、3月）では、冒頭で自身の狂言絵画資料研究の道程を示した後、前半では国立能楽堂所蔵の狂言古図四種について、他の狂言古図との関係に留意しながら検討を行う。特に『狂言古画帖』については曲名に誤りがあることを指摘する。後半はロンドン大学図書館所蔵の狂言古図十一図の紹介で、各図を詳しく検討し、これらが『狂言画集』と一連のものであることを明らかにしている。また「狂言古図の曲名不明曲の考察」（『京都聖母女学院短期大学研究紀要』42、3月）では、存在が知られている狂言古図を紹介し、そのうち曲名不明とされる絵について考察を行う。別種の狂言古図と比較することで曲名が特定できるケースがあり、実際に新出資料によって曲名が特定できたものを具体的に紹介している。新資料の発掘によって今後さらに研究が進展する可能性を窺わせる。

絵画資料研究にはこのほか松岡まり江「橘守国画『謡曲画誌』小考」（『演劇映像学2012』3月）がある。享保十七年（一七三二）刊行の『謡曲画誌』の守国画の特徴を考察したもので、全百三図を六つのグループに分け、能舞台そのもの様子よりも物語世界や名所絵図が多く含まれることを指摘し、一方で自然景を背景とする場合でも作り物や小道具など

は巧妙に反映されているとする。守国画は舞台と物語・名所の狭間の世界を描くとする点が興味深い。能や謡を楽しむ階層の好奇心を満たすビジュアルブツクの役割を果たしたことが指摘されている。

江戸末期から明治期にかけて活躍し、妖怪画や風刺画とともに能・狂言画にも力を注いだ絵師河鍋曉斎の能・狂言画展が、平成二十五年四月から六月に東京の三井記念美術館で、七月から九月に石川の金沢能楽美術館で開催された。その図録『河鍋曉斎の能・狂言画』（河鍋曉斎記念美術館・三井記念美術館・金沢能楽美術館発行、4月）には四氏による考察が掲載されている。西野春雄「河鍋曉斎の能画・狂言画」は、能・狂言の絵画の全体像をまず説明し、曉斎が大藏弥大夫に入門して狂言の修業を積んだことや、実際に舞台上で狂言を演じたことを紹介する。そして曉斎の能・狂言画は観察力やデッサン力だけでなく能楽への深い造詣に裏付けられていると説く。河鍋楠美「河鍋曉斎と能・狂言」は、曉斎の生涯をたどりながら能・狂言との関わりを説明し、『曉斎絵日記』にその様子が詳しく窺えることを示す。また曉斎の娘の曉翠の活動にも触れている。山内麻衣子「『紋画帖』に貼り込まれた曉斎お気に入りの繡箔裂」は、曉斎が着物文様などを描き留めた『紋画帖』を紹介し、そこに貼り込まれた五種の繡箔裂を分析、曉斎のこうした探究が能・狂言画にも生かされていることを指摘する。樋口一貴「曉斎の能画・狂言画と肖像表現」は曉斎の下絵に注目し、末広がり図の果報者が曉斎

の肖像であることを紹介、暁斎が注文主の肖像を絵に取り入れている可能性を考察している。なお、樋口一貫は「河鍋暁斎」というイメージ戦略—特別展「河鍋暁斎の能・狂言画」(「UP」42—6。6月)で「暁斎画談」などの伝記によって暁斎のイメージが形成されたことを指摘している。

河鍋暁斎記念美術館発行の『暁斎』110号(3月)にも、前年十一月開催の河鍋暁斎研究発表会の成果を中心に、暁斎と能楽をめぐる考察が掲載されている。東あや「狂言師 高安甚左衛門」は「暁斎絵日記」に四回登場する大藏流狂言師の高安甚左衛門について、暁斎との関わりや狂言師としての活動を考察する。阿部理代「『暁斎絵日記』に見る暁斎と能・狂言画」は、『暁斎絵日記』に見られる七十六箇所(能・狂言画)の描写を分析、多く登場する曲が注文の多い画題だったこととや、依頼人の顔ぶれ、制作風景などを考察する。加美山史子「暁斎と能狂言—上演した狂言を中心に—」は、暁斎が狂言を習った大藏弥大夫虎重・虎清父子との関わりや、実業家高橋義雄との交流を考察する。藤田昇「『暁斎絵日記』に登場する大藏流狂言師「山本東次郎」とその肖像写真」は、『暁斎絵日記』に二度登場する山本東次郎について検討を加え、これが初世東次郎であることを指摘しつつも、肖像画と違って丁髷姿ではないことや、絵がどのような状況を表すのか、東次郎の住所が仲御徒町とされていることなど、解明すべき課題が残されていることを指摘する。また、河鍋楠美「画集に紹介された暁斎の未発見能・狂言画」は明治四十三

年刊『暁斎画集』や四十四年刊のジョサイア・コンデルの著書に掲載されている未発見の能・狂言画を紹介する。

近世の能楽史に関わる資料を紹介したものに、天野文雄「近世初期能楽界の動向—『万治三年大藏主馬能伝書』の「役者評」をめぐる—」(『藝能史研究』203。10月)があり、金春大夫家別家の大藏庄左衛門家二世大藏主馬喜教自筆の伝書を紹介する。本文を翻刻し、役者ごとに評を整理した上で、『四座役者目録』の記事などと照合しながら役者評に考証を加えている。役者評に登場する役者は二十五名で、五座の大夫から大名家お抱えの役者まで、江戸初期に活躍した多彩な顔ぶれが揃う。喜教の役者評には客観的とは言えないものも含まれるが、他資料には見られない評や実態をよく表している評も多いと言う。玄人・素人の違いや座の違いを超えた師事関係が窺えることも当時の能楽界の様子をよく反映している。また、役者評での芸風についての用語に注目した部分も興味深い。

増田豪「能楽史料としての内藤家文書」(『明治大学博物館研究報告』18。3月)は、磐城平藩から転封となって延岡藩の藩主を勤めた内藤家の文書から、能楽史のどのような事がわかるかを三つの点から論じる。一つは猿楽配当米制度について、内藤家文書の奉書などから猿楽配当米の賦課率を調査し、大名の領地の所在場所に応じて賦課率が決められていたと指摘する。二つ目は延岡藩内藤家における能楽について、今山八幡宮や神明宮での神事能を家臣や町人が担って

たことなど、内藤家文書の能番組の分析を通して地方における能楽の様子を窺うことができる。三つめは明治期の能楽事情についてで、内藤家は明治になっても能楽に熱心であり、残された記録類によって華族たちの能楽への取り組みの様子がわかると述べる。明治大学博物館に所蔵される内藤家文書は膨大な量であるためその調査は容易ではないが、地道な調査によって江戸期の能楽の様子がさらに明確になるとが期待される。

月刊『観世』見返しの「観世文庫の文書」では、裂帖装小型中本「恋のおもに」（高橋悠介）、観世元章筆「二曲三体集」（中尾蕙）、『福王甚五郎出勤停止につき言上状』（宮本圭造）、『秘事之舞』（横山太郎）、『邯鄲抄』（伊海孝充）、『生田敦盛佐詞短様』（橋場夕佳）、『七夕和歌他』（柳瀬千穂）、『役者病気欠勤につき書付』（恵阪悟）、『作り花御達につき書状下書き』（深澤希望）、『観世織部宛藤本筑後守書状』（江口文恵）、『行幸并仙洞日光朝鮮人御馳走御能組』（井上愛）、『寛永三年二条城能組』（青柳有利子）が紹介されている。観世元章関係の資料が多く、江戸時代能楽史を探る上で貴重な資料が豊富に所蔵されている様子がよくわかる。

高橋悠介「観世大夫家における世阿弥筆能本―国立能楽堂「観世文庫」展を通して」（『平成二十三年―二十四年度国立能楽堂企画展示観世文庫創立二十周年記念「観世文庫展」報告書』。3月）は、国立能楽堂で展示された観世文庫蔵世阿弥自筆能本（布留・難波梅・松浦・阿古屋松）の四曲について考察

を加える。服部周雪（十二世観世大夫重賢の引退後の名）や観世元章という謡本改正に取り組んだ人物が世阿弥自筆能本を目にしていたことを指摘し、元章の明和改正謡本への詞章改訂には世阿弥自筆能本が参照されているなど、世阿弥自筆能本享受の様子について考察している。

喜多真王「翻刻『舞曲寿福抄』後藤得三本（四）」（『国立能楽堂調査研究』7。3月）は喜多七大夫古能伝書翻刻の四回目。（隅田川・柏崎・松風・野宮・紅葉狩・小鍛冶・葵上）の演じ方に関する事柄と、一調についての詳細な記事がある。小書の演じ方も詳しく触れられており、貴重な資料である。

初代梅若実資料研究会による資料紹介「初代梅若実筆『芸事上数々其他秘書当座扣并二略見出シノ事』翻刻（三）」（『武蔵野大学能楽資料センター紀要』24。3月）は明治期の能楽の様子を探る好資料。能楽だけでなく様々な事柄が取り上げられるが、能楽に限っても上演に関する事だけでなく歴史や能楽論にまで話が及び、梅若実がじつにさまざまな書物や資料に目を通していた様子がわかる。

飯塚恵理人「梅若万三郎家所蔵初世梅若万三郎師の「娘捨」関連資料」（『橘香』10月）は昭和十一年二月と十月に初世梅若万三郎が演じた（娘捨）に関する資料（雑誌や新聞の記事など）の紹介。高く評価された（娘捨）上演の様子を伝える資料である。

遠藤貴子・綿拔豊昭「小袖雛形本にみる謡曲意匠―「かきつばた」模様を中心に―」（『図書館情報メディア研究』11―

2。3月)は、江戸時代に小袖の模様を収録したファッショ誌として出版された小袖雛形本の研究。八十種に及ぶ謡曲意匠の中から「かきつばた」模様注目し、八橋が多く描かれる背景に謡曲詞章の影響あるとして、謡の流行と小袖模様との関わりを指摘している。

『大東急記念文庫善本叢刊中古中世編第11巻・諸芸Ⅱ』(島津忠夫責任編集。汲古書院。10月)には、狂言風流十八番の詞章を記した『風流十八番拔書』の影印が収録されている。本書は万治三年(一六六〇)に大藏虎明が書写したもので、(松竹・火打袋・父之丞・延命地藏・八幡・春日・弁才天・桑・犀之神・如意宝珠・岡之松・鶴亀・西王母・碁将棋双六・毘沙門・枇杷橋・大黒・費長房)が記されている。川島朋子による解題では、同じく虎明筆の『風流之本』『真伝集』との比較検討による先後関係の考察が行われている。(表)

### 【能楽論研究】

平成二十五年は、世阿弥生誕六百五十年として、世阿弥伝書をめぐる特集で書かれた論文がいくつかある。『鍔仙』の特集では、研究の姿勢や方法についても提言がなされているので、そうした提言から取り上げたい。まず、重田みち「世阿弥を総合的に捉える」(『鍔仙』623。3月)は、世阿弥を総合的に捉えるにあたってはその教養や思想面に焦点を当て、欧州の方法論や中国古典の教養もふまえて考えることが必要で、語学も含めた知識の習得が大切であるとす。また、岩

崎雅彦「世阿弥能楽論語彙の考証について」(『鍔仙』624。4月)は、「花伝」第七別紙口伝の「住する所なき」等の記事に關わる『金剛經』の「応無所住而生其心」について『続拾遺集』の藤原光俊の和歌の詞書にも同句がみえることや、第二物学条々の「国王・大臣」と「田夫・野人」が対になった記事に關して夢窓疎石の『夢中間答集』に類例がみえることなど、自身の旧稿に補足を加えつつ、世阿弥だけを見るのではなく、なるべく色々な分野から用例を集め比較検討することで立体的な見方ができるとする。いずれも傾聴すべき意見であろう。

世阿弥能楽論関係では、『花伝』と『申楽談儀』に關する論が複数出ている。前者については、以下二本。重田みち「『風姿花伝』奥義篇書き替えの経緯再考―田楽本座の役者一忠の記述及び能の名望論について」(『芸能史研究』203。10月)は、奥義篇の改訂過程についての考察。奥義篇で一忠について「ことに、物数を尽くしける中にも、鬼神の物まね、怒れるよそほひ」とふれるのは、幽玄を基本としていたはずの芸風を考えると不自然だが、この記事には足利義持の増阿弥後援の状況下で書かれたと思われる奥義篇後半の衆人愛敬論とも通じる面があり、本来は一忠の幽玄の芸についての記事だったのが、後から書き替えられたのではないかと推測する。また、「又云、ことごとく物数を極めずとも」以下「…風姿花伝を作する也」までの名望論は、問答篇第四条前半と部分的共通性を持ちつつも大差があり、これも義持の増阿弥

への傾倒を契機に、「遠国・田舎」への目配りを大切にするため、当初の奥義篇に増補された部分であると論じる。そして、奥義篇の記事と問答篇第四条後半部とを比較検討し、問答篇第四条後半部は応永廿年代の比較的早い時期に書き足され、奥義篇の能の名望論のうち、前段は応永二十五年六月より前に、後段は奥義篇完成期の応永二十六・七年に書き足されたのではないかと段階的な増補を推測する。

天野文雄「花伝」第六花修をめぐる諸問題（『國學院雑誌』114-11）は、第六花修が能作論というよりは一座の棟梁の心得を書いたものであるという竹本幹夫の指摘を具体的な本文に即して検証し補強した上で、直接的には四郎への相伝であったとしても、究極的には四郎を通して三郎元重に将来の棟梁としての心得を伝えるのが執筆目的であったとし、執筆時期の推定にも四郎だけでなく三郎元重の年齢を目安に考慮すべきであると論じる。また、「花修」の篇名は「一座の棟梁」として「能を知る」「花の種を知る」の意が籠められているとする。

『申楽談儀』関係では、能楽学会の『能と狂言』11（5月）が「『テーマ研究』世子六十以後申楽談儀」として以下三本の論文を収める。落合博志「『申楽談儀』用語考二題——「うるわしき為手」「前後し前後し書く」は、『申楽談儀』冒頭の「舞歌二曲をなさゞらん者をば、うるわしき為手とは、いかゞ申べき」の「うるわしき為手」は、立派な役者ということではなく、根本の点で必要条件を備えている正統的な能役

者を意味すると指摘する。また、第十五条の「前後し書く」「前後し書く」は、話の順序を入れ替えることではなく、記述を省略する意と解し、世阿弥の〈当麻〉クセも二段グセをカットした訳ではなく当初から当麻曼荼羅縁起を省略して作詞していると推測する。

三宅晶子「『申楽談儀』世阿弥が語ったこと、語らなかつたこと」は、世阿弥伝書のうち元雅相伝本と元能相伝本の内容上の相違点をふまえながら「『申楽談儀』全体の傾向を分析し、世阿弥は元能には舞について発展的に応用できるような重要な事を伝えていないこと、同書には「能を知る」というような抽象的言説が見当たらず、個別的具体的な演技指導に終始していることを指摘する。その一方で、謡い手の統率者・指導者、また能作における幽玄的歌舞能の継承者、上演に際して臨機応変に対処して興行を成功裏に導くための裏方的存在という面を、世阿弥が元能に期待していたことがうかがえる、と分析する。

西村聡「『申楽談儀』を語ることと書くこと」は、かつて伊藤正義が同書を「元能編の単なる世阿弥言行録ではなく、まさしく元能の編著書と言うべきである」としたのに対し、記述自体に世阿弥の意思がうかがえる箇所を具体的に検討しつつ、元能の編集の主体性を大きく見過ぎないよう警鐘を鳴らす。例えば、同書序における「三道」「花伝」の引用は世阿弥による要約的言及を元能が書き留めたものと見る他、同書に「聞書に及ばず」「書き置く」「書き載せず」などがある

場合に元能の編集意思だけでなく世阿弥の意思が働いたとも見られるのではないかと論じている。

このほか、三宅晶子「住するところなき世阿弥」(『鏡仙』627。7月)も、世阿弥には能の形式を整備した面だけでなく、時代に応じて変化し続ける自由度の余地を残した作品を是とする傾向もあったということを、『申楽談儀』にみえる(石河の女郎の能)の演出や(卒都婆小町)の改作記事などから論じている。

また、『おもて』連載「能苑逍遙」の天野論文二本も『申楽談儀』の記事を問題にする。天野文雄『申楽談儀』のなかの義満、そして世阿弥(『おもて』116)は、『申楽談儀』第十四条にみえる(卒都婆小町)の玉津島明神の御先の烏の記事で「これをよくせし」として日吉の烏大夫と言はれしなり」とある「言はれし」を受身ではなく尊敬と解釈し、秀句好きであった義満による命名を示すという説を提示する。また、第八条で(東国下)〈由良湊(山姥)〈百万〉の曲舞について「名譽の所」「名譽の曲舞」といい、第二十二条の「恋の重荷の面」として名譽せし笑尉」とみえる「名譽」も、世間の評判というより義満の称賛を指していると解釈する。同「世阿弥の「ひれ」と「そば」、そして「直ぐなる能」(『おもて』118)は、「直ぐなる能」と「ひれがある」あるいは「そばへ行きたるところある」能が対比されている第十四条の意味を考え、能勢朝次の解釈には、作品の「作意」あるいは「主題」という観点が抜けていると批判する。(高砂・放生川・実盛・山姥)

の各曲への世阿弥の言及を検討する中で、「ひれ」や「そば」は、その曲の「趣向」が一曲の作意や主題に照らして過剰である場合に用いているが、世阿弥自身はそれを必ずしも否定的にとらえている訳ではないとする。

世阿弥能楽論以外では特に取り上げるべき論が管見に入らなかったが、この他、禅竹宛の世阿弥書状を世阿弥能楽論との関わりから精読した天野文雄「五月十四日付世阿弥自筆書状の「時」——自筆書状から窺える禅竹の芸位をめぐって」(『国語と国文学』90-3。3月)がある。同論文では、「世阿弥 禅竹」が包紙上書で「きやより申させ給へ」としている「きや」は「きやう」(京)であろうとし、「いかさまく疑ひなく」とおこしている「く」は字形通り「之」と読むべきと提言した上で、世阿弥は禅竹の力量にはすでに「印可」を与えており、同書状ではその上の芸位である「得法」への到達が問題とされており、『九位』の上三花・閑花風の説明の中に「得法」の語がみえることから、「得法」は九位でいえば閑花風の芸位に相当すると論じている。そして、同書状はこれまで永享初年頃に二十代半ばの禅竹に出されたと推定されてきたが、禅竹を「いまだ向上の大祖とは見えず」とし晩年の元雅の得法に言及する永享五年三月の『却来華』よりも後のものと考えるべきで、『風姿花伝』第一年来稽古条々をふまえると、禅竹が三十四・五歳の永享八・九年頃ではないかと推測する。同書状にみえる「得法以後の参学」は「聖体長養」「頓悟漸修」という禅思想の系譜を引く言葉であると

いう指摘なども示唆に富む。(高橋)

### 【能楽史研究】

能楽史研究は江戸時代を境に、古い時代を伊海、新しい時代を宮本が担当する。

能楽史研究も世阿弥生誕六百五十年記念に関連した論考が多かった。『観世』では特別企画「観阿弥生誕六百八十年世阿弥生誕六百五十年」として、一年間論文・エッセイ・対談などが並んだ。能楽史関係は一本のみで、世阿弥少年期の境遇と政治的背景を考察した小川剛生「世阿弥の少年期」があった(上下二回)。上の「不知記」(崇光院宸記)を読み直す(80-4。4月)は『不知記』永和四年(三七八)四月二十五日条の世阿弥の句「松が枝のふちの若葉にちとせまどかかれとてこそ名づけそめしか」を再検討し、その時の彼の境遇に新解釈を示した論であるが、特に以下の二つの点が新しい。一つは鎌倉期以降の和歌の「藤」と「松」の関係と、「藤」藤若「松」良基」という構図を踏まえ、句の意味を世阿弥の美しさの評判は良基の威光のお陰だという解釈を示している点である。もう一つは、この後に載る崇光上皇の意見は世阿弥の脇句に対してのもので、上皇は十六歳になった世阿弥が自身を「雀子」のような微弱なものとの譬えである「藤の若葉」と詠んだことは直截すぎだと評した、と解釈した点である。こう読み直すことで、十六歳の世阿弥は少年期のすでに花は散り、一役者としての大きな転換期を迎えていたこ

とになるという指摘は、大変刺激的であった。下の「醍醐寺と新熊野社」(80-5。5月)は観阿弥・世阿弥父子の京都進出時の政治的背景を分析した論。足利家と深い縁があった醍醐寺三寶院の賢俊・光濟と、彼らの影響を受け、義満からも信任を得ていた新熊野社の宋縁と南都との太いパイプが、観阿弥・世阿弥父子の京都進出を導き、観世座の京都での活動に影響を与えていたと分析する。義満が臨席した新熊野社の興行だけでなく、京都での種々の興行の背景を読み解いた指摘は示唆に富む。

『鏡仙』も「世阿弥生誕六五〇年記念企画」として、一年間世阿弥関連の論考が並んだ。能楽史関係は次の二本。宮本圭造「伊賀観世系譜」の虚実(628。9月)は上島家蔵「伊賀観世系譜」の偽説の源を二つの視点から探る論。一つは『申楽談儀』の「伊賀小波多にて、座を建て初められし時……」などの記事を読み直し、通説と異なり観阿弥が伊賀で座を創設した可能性があることを指摘し、世阿弥が伊賀服部氏の後継であることを強く意識していたとする。もう一つは徳川秀忠の祖父にあたる箕笠之助の家系譜類をもとに、この家が山田の美濃大夫の系譜を引く大和猿楽の末裔であると推測する。「座を建て初められし時」の解釈はもともと素直な読み方だと思われ、首肯せられる説だろう。

松岡心平「世阿弥と満濟」(630。11月)は醍醐寺の僧満濟と猿楽の関係を読み解く論。満濟は芸能にそれほど関心を持っていなかったが、芸能と深い関係のある三寶院の門跡であっ

ため、自ずと芸能興行に関わることとなる。特に応永六年の醍醐寺での世阿弥の興行を『迎陽記』の記事から注目し、足利義満が後援した一条竹鼻の勧進猿楽の予行練習であった可能性を指摘する。さらに足利義満が後援した元重による金剛輪院の興行と札河原の勧進猿楽が先述の世阿弥の興行と重ねられていたことを読み解き、より世阿弥に好意的であった満濟の立場を浮き上がらせる。一条竹鼻の勧進猿楽については、前掲小川稿や同誌掲載の天野文雄「世阿弥」はどれだけわれわれのものになっているか(621。1月)にも言及があり、今後京都における世阿弥の活動を考える上で重要な場となると思われる。なお、天野稿は世阿弥の伝記研究の論点の整理から現在の能楽研究の問題点を整理した内容。また、同じく能楽史研究というわけではないが、現在、能楽学会の行事の一つとなっている世阿弥忌の成り立ちを補蔵寺蔵『納帳』発見から紐解く表きよし「世阿弥忌と補蔵寺」(629。10月)も能学史研究の一つとして取り上げておきたい。

世阿弥研究ではないが、彼の理論の継承者としての金春禅竹の思想や作品を、禅宗と三教一致思想が流行する文化圏との関係から読み解こうとする原田香織「金春禅竹にみる中世」(『國學院雑誌』114-11。11月)についてもここで言及しておく。歴史・作品・伝書研究を横断しながら、禅竹の思想における六輪一露系伝書的重要性を説く論考である。

それ以外の論考は古い時代から順に取りあげる。  
柳川響「平安時代の猿楽に関する一考察」(映像演劇学

2012。3月)は主に『小右記』『中右記』などから、相撲節会に際して行なわれた散楽、貴族の遊宴・殿上淵酔などに際して行なわれた散楽、呪師芸の記事を博捜し、紹介した論考。氏は歴史史料から更なる猿楽関連記事の発掘を期しているが、近年は史料編纂所データベースや群書類従のデータベースなどが整備され、用例収集は比較的容易になっている。だからこそ、収集した用例を的確に分析することが求められるだろう。本論は記事の紹介に比重があったので、次稿は詳細な分析を望みたい。

青柳有利子・内田英亮・木村信太郎・能勢和子・深澤希望・三浦玲・宮本圭造「みちのくの能・狂言」(国立能楽堂調査研究7。3月)は二〇一二年十二月から翌年一月まで国立能楽堂展示室で行われた同名展示展の資料キャプションに概説などを加えた稿。みちのくを舞台とする能、みちのくと狂言、みちのくの演能史、仙台藩と能楽、みちのくで作られた能の伝書・作品、近代のみちのくと能・狂言の6つのパートに分け、『天正狂言本』や上杉家・伊達家旧蔵資料を紹介する。

五島邦治「小川の筆屋木内弥二郎と猿楽―十六世紀京都市民の芸能事情」は手猿楽師として知られる木内弥二郎を「京都市民」として捉えることによって、京都における猿楽のあり方を再考しようとする論。有力京都市民であったと考えられる木内弥二郎は、手猿楽師としてではなく、山科言継と文化的環境を同じくする公家と市民という関係にあったこと、

言継周辺には多くの手猿楽師がおり、木内が際立つた舞手・謡手ではなかったこと、木内が大商人であったと同時に親の代から手猿楽の名手として活動していたことを指摘した上で、木内のような「猿楽の同好の志」が京都市民の中には数多くおり、座などを形成するのではなく、流動的に活動していたと推測する。有力市民の中の手猿楽師が財力を活かしながら、やがて出版事業などにも乗り出すという見取り図は大変興味深かったが、手猿楽の内裏の大規模な演能活動と私宅の座敷などの小規模な活動を「ギャップ」と把握することには疑問を覚えた。こうした二つの活動を行なうことは玄人も同じではないだろうか。

宮本圭造「謡講釈の世界―近世謡曲享受の一側面―」（『浸透する教養』。11月）は講釈の場での謡享受の歴史を辿る論。

天台僧・恵空『法音抄』、小栗了雲『小栗先生謡註解』のように難解な仏教語の注釈と密接な関係をもって始まる謡講釈は、斎藤唱水のようなプロとも言える講釈師や神道家の増穂残口などの活動を経て、石門心学者にも広がる。彼らは厳密な注釈ではなく、牽強付会ともいえる市井の人にもわかりやすい講話を用いる特色があり、その講釈は後代の注釈などに引き継がれるわけではないが、謡文化の裾野を広げる役割を果たしたと分析する。これまでほとんど研究のなかつた分野から、謡文化の広がりを考える上での興味深い視点が提示されている。

吉村旭輝「近世田楽法師の世襲と退転」（『藝能史研究』203）。

10月）は近世に活動した田楽の家の京都泉原氏と紀州坂本氏の退転時期を中心とした考察。泉原氏は「東照宮様式百回御忌御祭礼日記」の記事をもとに、文化十年にはまだ活動していたと推測し、元治二年までの間に退転したと考える。坂本氏は紀州に移住してきた藤田氏と姻戚関係を結ぶと、共に活動するようになり、文政期から徐々に坂本氏から他家へ田楽勤役の譲渡が行われ、天保十三年以降、資料から姿を消すと指摘する。（以上伊海）

地方の近世能楽史に関する論文が一本あった。佐藤和道『能御囃子番組』に見る豊橋の能」（『演劇研究』36。3月）は、早稲田大学演劇博物館に所蔵される天保・安政期の豊橋を中心とする能・囃子番組四十三点を紹介して、三河吉田城下における演能の実態を明らかにしたもの。豊橋における能の歴史は、これまでもつぱら魚町能楽保存会が所蔵する面・装束によって語られることが多く、それを補う文献資料の存在はほとんど知られていなかった。同稿が紹介する番組は、その残存資料の偏りを補正する貴重な記録で、番組の人名の分析から、吉田城下の能が、家老を筆頭とする吉田藩士や城下の町人によって担われていた様子を明確にする。

続いて近代能楽史関連の論文。近代の能楽史は近年もつとも多くの成果が挙がっている分野であるが、本年も数多くの論文が発表された。その内容も、梅若実に関するもの、婦人能・女流能を取り上げるもの、外国人と能楽との関わりについて論じるもの、地方における能楽受容の実態を明らかにす

るものなど、実に多岐にわたっている。中でも『武蔵野大音楽資料センター紀要』24(3月)が、前号に引き続き、「能・狂言と近代国家」をテーマとする公開講座の成果として、三本の論考と鼎談の記録を収めるのが注目されよう。三浦裕子「久米邦武と能楽再興」は、氏が監修者となつて関わつた久米邦武美術館での記念展示「久米邦武と能楽展」における調査成果に基づく論考。従来、オペラとの類似から能楽に価値を見出した最初の人物は岩倉具視であるとするのが通説であつたが、実際には岩倉に随行していた久米邦武の見解に拠るものであつた可能性を指摘し、久米が明治の能楽復興に果たした重要な役割にあらためて光を当ててゐる。別府真理子「初世梅若実と1000人の弟子」は、梅若実がまとめた門人帳「門入姓名年月控」を基に、梅若実に入門した弟子の顔触れと、年代別の傾向を詳細に検討した。明治初期には旧公家や旧大名の家族が中心であつたが、明治十年代から二十年代にかけて財閥系の人々の入門者が激増する様を明らかにする。梅若実がこのように多くの入門者を獲得しえたのは、彼の指導方法とも深く関わつていたとする指摘は興味深かつた。加賀谷真子「東アジアと能楽」は、帝国主義時代の日本の植民地下における能楽受容の歴史を概観した上で、二十世紀における東アジアと能楽との新たな関わりの事例として、多田富雄の新作能『望恨歌』にも言及する。「観梅問題の100年」は、梅若六郎玄祥・小林責・羽田昶の三氏による鼎談の記録で、観梅問題が生まれる背景から梅若の観世流

復帰にいたる流れが、分かりやすく説明されている。梅若氏の口からはじめて明かされる、興味深いエピソードの類も多く、貴重な資料といえよう。

地方の近代能楽史に関する論考が三本。中野朋子「平瀬露香の能」(『大阪歴史博物館研究紀要』11。2月)は、雑誌『武者小路』に連載された平池樵青の「露香監蔵記」を主な依拠資料とし、幕末・明治期の大阪能楽界における大パトロンで、金剛流の能を舞つた平瀬露香の事蹟を辿つたもの。露香が一般に知られる舞台名「阪氏連」とは別に、「赤松稚枝」の雅号で能を舞うこともあつたことなど、いくつかの新見を提示している。なお、同稿では「赤松稚枝」こそが露香が最初に名乗つた芸名であろうと推察される」とするが、幕末・明治初年の番組に頻見する「尾木泰之助」が露香のことであるらしく、これが露香の最初の芸名ではなかつたかと思われる。露香については、まだまだ考究すべき事柄が多い。平成二十八年の古典籍大入札会にも、「平瀬露香諸芸貼込帖」が出品されるなど(同目録)、新資料の発掘も期待され、今後の研究の進展を待ちたい。中尾薫「能楽の近代化と高木半」(『待兼山論叢』47。3月)は、明治期に独自の能楽改良論を主張し、数々の新作能を発表した大阪の素封家、高木半の事蹟について取り上げたもの。彼の能楽改良論には多くの反発があつたこと、にも関わらず彼の新作能が上演・出版されているのは、高木と大西亮太郎・観世清廉・梅若実との交流がその背後にあつたことを指摘する。南本有紀「昭和初期、岐

阜市周辺の能楽愛好について」(『岐阜県博物館調査研究報告』<sup>34</sup>。3月)は、岐阜県博物館に寄贈された藤田徳松旧蔵の狂言台本・番組等の紹介。藤田は明治二十二年生まれ、昭和三十九年没の岐阜の大地主。観世流の謡と大藏流の狂言を嗜み、昭和二十年代から三十年代にかけて、岐阜を中心に多くの舞台に立っていたことが、これらの資料から確認されるという。

続いて、婦人能・女流能に関する論考。伊藤真紀「能舞台上がった女性たち」(『演劇学論集』<sup>56</sup>。6月)は、大正十一年に淡路島の政岡家邸内の能舞台で行われた、女性のみによる演能、いわゆる「淡路婦人能」を取り上げ、その時代的背景や、舞台を提供した政岡嘉三郎の事蹟、政岡家における一家ぐるみの能の稽古の様相を、聞き取り調査を含む綿密な調査によって明らかにする。一家ぐるみで能を嗜む「家庭の遊楽」としての能楽のあり方が、近代家族観の形成とも深く関わっていたらう、とする指摘など、随所に重要な指摘が見られる。青木涼子「東京音楽学校と女流能楽師誕生の歩み」(『跡見学園女子大学文学部紀要』<sup>48</sup>。3月)は、東京音楽学校の存在が女流能楽師の誕生にいかにな大きな役割を果たしたか、を論じたもの。キーパーソンとして、池内信嘉・観世左近元滋の二人に注目。出身地松山において女性が普通に能を演じる様を見て育った池内信嘉が、東京音楽学校の能楽選科への女性の入学認可と、その後の女流能楽師の誕生に大きく寄与していること、当初は女流能に批判的な立場をとっていた

た観世左近も、東京音楽学校の講師着任以後、女子学生の指導を通じて、女流能楽師の誕生に一役買ったことなどを、当時の雑誌類や東京音楽学校関係の資料から丹念に辿る。

他に外国人と能楽との関わりについて論じた論文が数本あった。スラボフ・ペトコ「外国人が観た明治初期の能楽」(『日本語・日本文化研究』(大阪大学)<sup>23</sup>。3月)は、明治初期の外国賓客の饗応能、および同時期の英独仏文献における能楽紹介の事例——ミットフォードの『昔の日本の物語』、チェンバレーンの『日本人の古典詩歌』などを概観する。堀まどか「野口米次郎の能の紹介と、ゴードン・クレイグの雑誌『マスク』」(『国文目録』<sup>52</sup>。2月)は、詩人の野口米次郎が一九〇〇年代初頭にイギリス・アメリカで行った能楽に関する講演や能・狂言台本の翻訳が、同時代の欧米の文化人にどのような影響を与えたのかを詳細に検討したもの。従来、野口の能への関心はパウンドやイエイツに触発されたものと見られていたが、海外に向けた野口の能・狂言の発信は両者に先行し、むしろ野口を介してイエイツが能への関心を持ち始めたと考えられること、イエイツのモダニスト演劇家クレイグが創刊した雑誌『マスク』において発表した「日本の舞踏」などの論考には、野口の論考からの影響が多く見られ、同誌を通じて、さらに広範囲な波及効果があったことを論証する。海外における能の受容に、野口米次郎がいかに重要な役割を担っていたか、その再評価を促す注目すべき論考といえよう。この他、お茶の水女子大学の『比較日本学教育研究

センター研究年報』9(3月)にも、前年に開催された「西洋に響く能」と題するシンポジウムの報告として、西野春雄「能になった西洋の詩・戯曲」、モニカ・ベータ「装束を通して能のこころを伝える」、馬場法子「能楽と現代音楽の出会い」など、文学作品・能装束・能の音楽など、多様な視点から、海外における能の受容、能における海外の受容について取り上げた多くの論考が載っていることを付言しておく。

最後に能面に関する論考を取り上げておきたい。保田紹雲「越前出目家の系図の謎解き」(『名古屋芸文化』23。12月)は、江戸期の出目家の家譜を博搜し、資料間の矛盾に着目することで、出目家の系図を明らかにしようとするもの。多くの資料を踏まえる点は評価されるが、結論にいたる論証の過程が分かりづらく、また、安祥寺の過去帳に見える開基の没年、天正十年が実際の没年ではなく、法要の年時とする点、出目元利家の作例が寿満以降、ほとんど見られないことについて、火災で手本面が焼失したためであるとする点など、想像の域を出ない憶説が散見し、十分な説得力を持っているとは言いがたい。『駒井日記』に見える「しうんゐん」について「下間少進に違いないと考える」とするのも、考証が不十分であろう。漢字ではなく仮名で表記されていること、「しうんゐん様」「御きくさま」の名が並んでいることからして、この「しうんゐん」は女性である可能性が高く、下間少進と同一人物とは、到底考えられないのである。大谷節子「頼政」面を遡る(『デジタル人文学のすすめ』。7月)は、多年

にわたる能面調査に基づいて構築された能・狂言面データベースを活用し、能(頼政)の専用面「頼政面」の様式がどのように形成されてきたのかを考察したもの。戦国期以前には額と頬に皺を刻んだ尉面が頼政の面としてもつばら用いられていたが、そこから、老武者の苦悩を強く表現した面や、武将の猛々しさ、勇壮さを強調した面が派生的に生まれていった過程を明らかにし、それが能(頼政)の作品解釈とも密接にかかわっていることを論じる。能面の様式の系統図を歴史的に辿る研究は、これまで殆ど行われておらず、新たな可能性を感じさせる成果といえよう。(以上宮本)

### 【作品研究】

本年に発表された作品研究を、石井・山中の順で分担して展望する。分担の基準は厳密ではないが、出典研究や出典との関係等を論じるものを石井が、どちらかといえば演出・技法研究に近いものを山中が担当している。なお、本年は世阿弥生誕六五〇年などに関わる記念特集が『観世』と『鏡仙』で企画されたため、それらに含まれる作品研究については、右の分類とは関係なく、『観世』を石井が、『鏡仙』を山中が担当し、それぞれまとめて言及している。

源氏能に関する論考を三本。斉藤昭子「(浮舟)をカケリ狂わせる―「女体」の極みとしての能「浮舟」―」(『日本文学』62-2。2月)は本説の『源氏物語』において宇治の「所がら」の風物として捉えられている「柴積み舟」を棹(ある

いは柴舟)の形で可視化し補助的に重ね合わせるにより、能は捉えどころのない浮舟像を視覚化したと述べる。さらに、薫・匂宮のまなざしをシテの語りに取斂させることで成立している前場に対し、浮舟自身の詠歌と心内語によってシテの内面世界を志向する後場の構成は、究極の虚構としての「女体」を現出させることを目指したものとす。作詞者の横尾元久については殆ど言及がなく、〈浮舟を世阿弥作と理解しているかの如き論調が気になるが、『源氏物語』研究の立場から提示されたテクストの読みは、作品研究の一つのあり方を示すものともいえる。倉持長子「〈浮舟〉と『源氏物語』——初瀬信仰をめぐる浮舟の変貌——」(『能と狂言』11。5月)は〈浮舟を支える独自の論理を、〈浮舟〉の初瀬信仰という視点から考察したもの。〈浮舟〉のシテが初瀬観音への一途な帰依を見せるのに対し、『源氏物語』の浮舟は初瀬への参詣を拒否している点に着目し、中世においては浮舟が出家を通じて初瀬観音の靈験を信ずるに至ったと解され『源氏小鏡』諸本の中に浮舟の出家を兜率天と関連させて言及したものがあることから、そのような中世的理解がシテの人物造型に反映されていると論ずる。その上で、初瀬観音・日吉山王と天照大神の同体説が漂泊する浮舟を救済する論理として働いていると指摘する。

井上愛「〈千手〉作品研究——小書・鄧曲舞をめぐる」(『観世文庫創立二十周年記念『観世文庫展』報告書』3月)は観世文庫による〈千手〉の小書「鄧曲舞」を起点とした作品研究。

この小書で大幅に削除された曲舞と削除されなかった千手・重衡の間答場面に着目しながら、〈千手〉本来の作意や千手・重衡それぞれの人物造型に迫るもの。〈千手〉前半部で重衡が語る「現当の罪」こそが能と『平家物語』との最大の違いでもあったはずが、曲舞の省略によってその「罪」意識の道程も省略され、千手と重衡の交流と逢瀬に主題が絞られた結果、物語としての重層性を失うに至ったと論ずる。やや冗長ながら、小書演出が切り落としたものを手がかりに作品の読みへとつなげていく試みを評価したい。

信光作「玉井」と絵巻「かみよ物語」との先後関係をめぐる論が相次いで発表された。能と絵巻はA彦火々出見尊が豊玉姫に出会う「井の場面」、B尊が釣針を取り戻して龍宮を去る「帰還の場面」の描写が近似する。これを踏まえた上で金英珠「絵巻『かみよ物語』の成立をめぐる——謡曲『玉井』との影響関係を中心に——」(『説話文学研究』48。7月)は、それぞれの場面の構成要素を詳細に検討して影響関係を確認しつつ、『新能番組』において上演回数が少ないこと、「かみよ物語」の詞書に高麗国と並んで「りうきう(琉球)」が異国として掲げられていることなどから、本絵巻の成立を十五世紀と推定し、断定は避けながらも絵巻が能に先行するとの見解を示す。これに対して小林健二「能から物語草子へ——『玉井』と『かみよ物語』絵巻——」(『國學院雑誌』114。11月)は、前述A・Bが原拠の『日本書紀』から離れて独自の展開をみせ、特に豊玉姫が玉依姫を伴って登場する点を重視し、龍

王・豊玉姫・玉依姫が登場するBは中世日本紀的世界のビジュアル化ではなく龍神物の後場に登場するツレ天女のパターンを利用したものと指摘し、『かみよ物語』の作者は(玉井)から着想を得たと結論付けた。両氏の結論は正反対のようだが、金稿においても(鶴羽)(賀茂)などの「シテとツレ」という能の演出」によって豊玉姫・玉依姫という二人の姫君のモチーフが成立した可能性については言及されている。やはり風流的神能の視覚的イメージに触発されて絵巻が作られたという流れを想定する方が妥当であろう。

廃曲・番外曲に関する研究も多かった。大山範子「謡曲《休天神》考」(『神女大國文』24。3月)は明石市に現存の休天神社の縁起を素材とする番外曲(休天神)の作品研究。後場の趣向に(嵐山)からの影響が看取され、(白鬚)(岩船)の詞章も撰取されていることにより、為政者の御代を寿ぐ祝言性が増幅すると指摘。名所教えの段では休天神より有名な明石の名所を列挙していることに着目し、天神社そのものの威光よりも当社を再興した名君松平信之を賛美する意味合いが強い「(当地能)」であると論ずる。鶴澤瑞希「多武峰様具足能『鶴次郎』——武装の稚児の登場——」(『能と狂言』11。5月)は寛正六年(一四六五)南都一乗院四座立合多武峰様猿楽で演じられた(鶴次郎)を典拠・演出・時代背景から多角的に論じたもの。本曲は多武峰様具足能ということもあり上演史や武装の表現ばかりが注目されてきたが、鶴澤は『大塔物語』中で語られる和田合戦の鶴次郎の物語を手がかりに、本曲の典拠

として時宗によって管理された鶴次郎伝承の存在を想定する。その上で、本作の合戦場面では鶴次郎が着用する「狩装束」という出立が稚児流鎗馬を取り入れたものであることを指摘し、この演出を「優雅で非力な稚児」と対になる「武装する稚児」が賞翫された当時の稚児をめぐる文化的状況の反映と説く。

田口和夫「白澤王(伯太王)の系譜——絵画・説話付荒平舞——」(『藝能史研究』203。10月)は内容不明の廃曲(伯太王)に関する絵画・説話面からの考証で、別稿「能(伯太王)と問狂言——万集類・説話・芸能——」(『能と狂言』12)と対になる論。清涼殿鬼間の南壁に描かれていたという「白澤王切鬼」に言及する論考や諸資料の検討を通じて「はくたわう」伝承を整理し、鎌倉初期にその絵様がわからなくなっていた「はくたわう」が辟邪絵であったこと、軍記・芸能の中では鬼を制する剛勇の「はくたわう／はくたわう」が成句として広がっていたことを示し、見聞系明詠集注の知恩院本と同系の伯太王・死活杖説話を収める『一乗拾玉集』においては知恩院本の摩騰・法蘭伝法譚が深沙大王譚と密接に関わる玄奘三蔵取経譚へと変容していることから、能(伯太王)はこの段階で形成されたとする。さらに『一乗拾玉集』で切り捨てられた死活杖が神楽の「荒平舞」に受け継がれていることから、能(伯太王)と「荒平舞」が知恩院本明詠注の白澤王説話を源流とし、分流した説話に基づいた兄弟関係にあると結論付けらる。

『観世』特別企画は「観阿弥生誕六百八十年・世阿弥生誕六百五十年 能の大成者たち」。竹本幹夫「観阿弥時代の能と謡」（7月）は観阿弥による大和猿楽の音曲改革と観阿弥作（自然居士）に見る作風の特色についての論考。『音曲口伝』『申楽談儀』の記事や『五音』上下の所収曲を手がかりに、観阿弥が曲舞謡の導入に際して既成の物語文を「クリ・サシ・クセ」などの小段に分ち、「クセ」に八拍子を当てはめて七五調破律文に構成し、猿楽音曲の旋律を施したこと、独立の謡い物としての曲舞を二段グセ形式から現在の形へと整理したことを示す。また、『五音』下に掲出の（自然居士）冒頭句を説法の段の説教パフォーマンスの一部と考え、言葉芸から語り舞、風流的所作という連続を通じて次第に舞台を盛り上げていく構成全体が観阿弥の書き下ろしで、世阿弥による大規模な増補改訂はなかったと推測する。小田幸子「観阿弥から世阿弥へ―関寺小町をめぐって」（8月）は関寺小町（の能作史における意味を考察した論考。本曲中に引用される小町関係歌の多くが小町伝説と関連することから、表だって小町の恋愛を取り上げる代わりに和歌の背景にある「多くの男性と浮き名を流した」小町の姿を忍び込ませている点に着目し、男を翻弄したなれの果てという因果応報としての小町の零落を前面化させず、過去を懐かしむ心を強調して「老いの「哀れ」を描いた点に、老女物の最高峰としての要因をみる。

三宅晶子「創生期の能の魅力―夢と現の間―」（9月）は世

阿弥時代の能を対象に、異界の存在が登場する曲における夢と現との描き分け方を①前場は現実・後場は夢中、②前後場とも夢中、③前後場とも覚醒中、④曖昧な場合、⑤奇跡の体験に分類し、世阿弥は夢・幻か現実かを明確に書き分け、夢の場合は非現実的な面白さや幽玄性を強調していると指摘。これに対して後代の作品は夢と現との境が曖昧な曲が多く、定型的・慣用的表現によって幽玄性濃厚な作品が生み出されたと説く。松岡心平「鶉羽」のなりたち」（10月）は世阿弥作の九州を舞台にした神能から「鶉羽」を取り上げ、その成立背景に迫る。記紀や絵巻と異なり本曲では豊玉姫の出産場所が「鶉戸の岩屋」とされているが、この地は義満の近習梵灯庵（朝山師綱）によって初めて名所として取り上げられたもので、師綱が義満の上使として島津元久のもとを訪問していること、義満によって日向・大隅両国の守護職を安堵された元久が上洛の際には京都の島津邸にて世阿弥の演能が行われていることを勘案すると、「鶉羽」はこの時の新作である可能性が高いと論ずる。天野文雄「世阿弥の《砧》再考」（11月）は「世阿弥の《砧》を読み解く」（『おもて』2011年10月）の続考。妻が「三年」という歳月に拘る背景に「遠境にいる夫から便りがなく場合、子がなければ三年で嫁できる」という『戸令』の改嫁規定があること、和漢朗詠集古注釈における「蘇武妻譚」の世界を借りつつも妻の打った砧の音は夫に届かなかったという対照的な設定になっていることを示す。さらに『申楽談儀』における世阿弥の《砧》評の「末の世」「後

の世」を「末世の今」と理解すべきであると説く。馬場あき子「世阿弥と和歌」(12月)は世阿弥の本歌取について(桜川)と(鶴)を例に検討。(鶴)の前シテの失意や嘆きが恋歌の点描によって綴られていると述べ、恋歌の「艶」をもって「怨」を語ることで怪異の生に哀艶な心情を加えていると指摘する。

最後にいわゆる「論文」ではないが、西村聡「能楽研究の方法と資料―能(百万)の作品研究を例として―」(『文化資源情報論』2013・2。3月)を紹介する。本稿は文化資源情報学概論の教科書のために書かれたもので、(百万)を例に、世阿弥伝書の記述からどのような情報を得ることができるのか、演能記録や伝存諸本の多寡から何がわかるのかなど基本的な事柄が丁寧に説明されている。読みながら能の作品研究が形になるまでの過程を追体験できるという意味でも非常に有益である。能で卒業論文を書こうと考えている学生や能の研究を志す若い人たちには一読を勧めたい。(以上石井)

『鏡仙』の「世阿弥生誕六五〇年記念企画」のうち、作品研究や演出研究に関わるものは次の四本。記念企画だけあって、短い紙数にも関わらず重要な問題の提起や興味深い論が多かった。

田口和夫「世阿弥自筆本(雲林院)の改作から」(622。2月)は世阿弥自筆本の第四紙だけ墨色が違うとの発見から出発し、役名表記や演出注記などにも第四紙のみ他紙と異なる特徴を持つ点があることと併せて、第四紙を含む完曲が本台本執筆以前にすでにあり、世阿弥がそれを基に改訂執筆する際に第

四紙部分だけ流用したと推定する。墨色については別に、第一〜三紙と第四紙以降で分ける竹本幹夫説(世阿弥自筆本(雲林院)以前)『鏡仙』344。86年12月)があり、また、山中は第一紙と第四紙以降が同じで花間答を記す第二、第三紙だけが別のものではないかと主張したことがある(「井筒」への道)『文学』615。05年9月)。どの説も宝山寺での実見に基づくものだが、現物を見てはいてもたしかに比べられるのは直接繋がっている二紙だけでも言える。第三紙と第四紙の墨色が異なるという点は諸説一致しており確実なようだが、他の点についてはもう一度あらゆる可能性を想定したうえで確かめてみる必要があるだろう。そのことを別にしても本稿には自筆本(雲林院)が薪猿楽での上演のために禅竹に与えられたとの想定、現行(雲林院)への改訂も世阿弥によるのであるとの見解等々、改めて考えてみるべき問題が多く提起されている。竹本幹夫「世阿弥夢幻能の成立小考」(631。12月)は、(松風)の人格の変化、正体明かしと昔語りの位置、狂乱から舞にいたる構成等、夢幻能としては破格の要素が多いことを指摘し、「夢幻能様式の成立を、(松風)の制作から(難波梅)や(実盛)制作にいたる応永二十年前後と想定」する。前シテが化身、後シテが本体という二場物の能は「失せては出で来」る芸風の光太郎時代からすでに在ったとの指摘も重要と思われる。

高柔いづみ「返しを謡うということ―小段形成の一手順」(『鏡仙』625。5月)は、世阿弥が音楽面での形式をどのよう

に整えていったかという考察。区切りを感じさせざる手段として句を繰り返したことが「上ゲ哥」成立の契機になったとの推定は、古作の能に定型の「上ゲ哥」が少ないとの論証によって説得力があるが、「ロンギ」の返シの有無については、定型化の過程に返しを加える段階と加えた返しを省略する段階があるとの複雑な論となり、少し苦しいように思われる。

小田幸子「世阿弥時代の『船』」(626。6月)は「申楽談儀」18条に見える船の作り物に関する記事を取り上げ、同時代の延年風流の資料や室町後期の演出資料等も参照しつつ、装飾を施す例や船を動かす仕掛けの可能性等について考察する。

個別の論でも、広く能の演出や様式に目を向けるものが多くあった。竹本幹夫「能の構造と技法における様式の成立をめぐって」(『国文学研究』169。3月)は、能のさまざまな位相に見える様式性をそれぞれが形成された時代の問題と合わせて論じる。具体的には翁猿楽の様式性、能の脚本構造の様式性、音楽・演技等の様式性、カマエやハコビという身体技法の様式性が取り上げられるが、翁猿楽以外の諸例では様式化以前の古態と合わせて論じられているため、現在我々が「能」と認識するものの基本がどのようになってきたのかという大きな問題の考察となっている。「アジア儀式戯劇国際学術シンポジウム」での口頭発表に大幅に加筆修正したものとこのことで、基本的な事項の確認にも字数を割いているが、「世阿弥時代以前の日本全国において、ほぼ同じような内容の翁猿楽が演じられていたとすれば、それはすぐれて類型的

な、つまりは様式性の高い芸能であったということ」(七五調を基調としない無律散文中心の、四場以上に及ぶような構造の能は現存しない)等の鋭い指摘や、夢幻能構造の完成を応永二十年前後とし(松風)をその過渡的作品と捉える視点(その詳細は「鏡仙」で説かれる)、能楽伝書の記述や人体図の分析から江戸時代前期にはカマエとハコビが成立していたであろうことを導く論証など、傾聴すべき点が多い。

表章(「講演」能型付の新旧)「泣く」から「シホル」へ(『能楽研究』37。3月)は、二〇〇六年藝能史研究会例会での研究発表の原稿化。当日配布の資料も見やすい形に直して掲載している。実際に調査された型付資料を簡便な情報を添えて成立年代順に並べた【調査資料一覧】や型付用語を手作業で抜き出した索引【型付用語抄】は、今後の演出研究の基本文献となるべきもの。膨大なデータから「宝永・正徳の頃に『シホル』が使われ始め、享保期間は『泣く・しほる』が共存していたが、元文末には『シホル』が圧倒的になり、『泣く』は型付用語として使用されなくなっていた」という結論が明らかになる様は、資料を博搜し資料に語らせる氏の学問の面目躍如。今後は成立年代の不明な型付も、まずは「泣く」か「しほる」かで大別し、索引の【型付用語抄】と照らし合わせることでほぼ年代が確定できることになる。

同誌には、中司由起子・江口文恵・柳瀬千穂・深澤希望によるワークショップの報告「江戸初期型付に基づく実験的復元」も載る。東北大学附属図書館蔵の秋田城介実季自筆の型

付を読む研究会の成果を基に、金春流と観世流の能役者の協力を得て型付所載の仕舞を実験的に復元するという試み。前年11月に鏡仙会能楽研修所舞台でおこなったワークショップでは、復元の手順に詰めの甘い部分があることや現行の型に囚われすぎているとの指摘も受けたが(これについては全体の統括にあたった山中の責任と感じている)、非常に複雑な江戸初期の型付の書き込み、複数の型付資料がおそらく同じ一連の所作の異なる部分を取り上げて記している例などを、どう処理して活字化するか、この報告を作成する際に四名が工夫した方法はその後改訂を重ね、能楽資料叢書3『東北大学年附属図書館蔵秋田城介型付』(二〇一五年三月)に活かされている。若い人の論文をもう一つ。三浦玲「観世長俊と風流―〈輪蔵〉を中心に」(『国文目白』62)2。2月)は修士論文をまとめたもので、長俊作(輪蔵)における風流アイ「福部の神動入」に関する考察。「風流アイ」を著者自身がどう捉えているのが曖昧で、成立年の想定などにも無理があるが、同時代の他の風流アイのように空想的ではなく北野社の現実の情景を取り込んでいるとの指摘は面白かった。

実践と深く関わるものに、田村良平「復曲能(巴園)の演出について」(『明星大学研究紀要(人文学部・日本文化学科)』21。3月)がある。二〇一三年一月に横浜能楽堂企画公演「美の世阿弥・華の信光」第三回として上演された復曲能(巴園)の詞章と演出およびその意図の正確な記録で、室町末期写本に基づきながらも現代の能形式によって細部を整備する

という方針を明記し、本協能形式と四番目録的協能形式の両様を想定して詳細な型付を挙げている。復曲や新作は何度も試行錯誤を重ねて次第に決定版ができあがっていくものではあるが、このようにしつかりとした記録を残す例は珍しい。後に続く者のために非常に有益でありがたい処置と思う。

雑誌「観世」に二〇一一年から連載されこの年の12月号で最終回となった、高桑いづみ・中司由起子「小段つてなに?―能の構造を考える―」も、純粋な研究とは違うかもしれないが、能の小段についての最新の知見に基づいた上質な解説として有益。10〜12月の三回は、それまでに取り上げた小段の索引編となっているのも便利である。

最後に文理融合研究を一つ紹介する。ツヴィカ・セルベル「能のコトバの抑揚」(『演劇研究』36。3月)は、観世流の謡を用い、「コトバの抑揚」の構成要素を、ピッチの抑揚と音量のコンピューターグラフから分析した」もの。能に精通している著者の曲趣理解とそこで指摘されるコンピューターグラフの形状とはよく合致しており、示されている例については十分納得できる。男のコトバは抑揚の大きさと音量の大小が一致し、女のコトバの場合は抑揚が大きくなると音量が小さくなるという指摘も興味深いが、これだけの例ではどこまで汎用性のある規則なのか判断できないのではないだろうか。コンピュータを使った分析などに触れた能楽関係者がよく言う「そんなことはあたりまえではないか」とのコメントには与したくないし、よく知っている人間が当たり前だと

思っていることを客観化、一般化して広く知らしめることは重要と思うが、本論文はデータ取得の方法も示されておらず、科学的・客観的な研究というより、やはり能の謡を味わう耳を持った著者の感性に拠るところの多い論考と思われる。それが悪いとは言わないが、より科学的な方法での論考を待ちたい。(以上山中)

### 【狂言研究】

本年に発表された狂言研究を、国語学関係は豊島、それ以外を小林が分担して展望する。

岩崎雅彦「博奕打ちの説話と狂言―『直談因縁集』を中心に―」(『國學院雑誌』114(11.11月)は、狂言の題材となった説話を考察したもの。岩崎氏は、これまでもにも仏教説話に見られる譬喩因縁譚の構想や展開が狂言と共通することに着目し、とくに法華経直談系の説話集である『直談因縁集』に所収される説話と狂言の相似を説いてきた。ここでは、直談系の説話に売僧や博奕打ちが人を騙す話型が多く、それが日常生活を生きた人間を描いた狂言にとって格好の題材であったことを論じる。狂言が室町の世相をうつす芸能であることを示した好論と言える。

戸田健太郎「狂言における「地謡」の変遷(その三)―能の地謡との関係をめぐって」(『演劇学論叢』13.7月)は、これまで取り上げられなかった狂言の地謡の変遷を考察した論文の第三弾。能の地謡と類似する八点をあげ、《千切木》の終

曲部における立衆の斉唱が能《西行桜》と酷似することをあげて、狂言は古くから能の地謡の演式を摂取していたことを証明する。

近年、狂言の舞台を描いた絵画資料が次々に紹介され、作品研究にも利用されるようになったが、藤岡道子「狂言の絵画資料の考察―国立能楽堂収蔵品を中心に」(『国立能楽堂調査研究』7.3月)は、その研究をリードする藤岡氏が、国立能楽堂に所蔵される絵画資料の中で重要と思われる「古能楽図(慶長最古図)」「江戸初期古能狂言之図」「狂言古図」「狂言古画帖」を取り上げて、狂言絵画史上の位置づけをかけたもの。多くの資料を調査している藤岡氏ならではの仕事である。とくに「狂言古画帖」の不明曲を新資料の「謡狂言図」(江島弘志蔵)によって明らかにした功績は大きい。また、ロンドン大学図書館(SOAS)に所蔵される狂言古図をカラーで紹介するのもありがたい。藤岡氏も論中で述べているが、同じ演目で図様が類似する作例が多くあり、全体を俯瞰した総合的な調査研究が必要な段階に入ったと言えよう。それが出来るのは精力的に資料を渉猟している藤岡氏だけであり、その成果がまとまることが期待される。

高桑いづみ「鶯流狂言の小舞謡―無形文化遺産部所蔵「山口鶯流小舞謡」の記録をめぐって―」(『無形文化遺産研究報告』7.3月)は、昭和33年に文化財研究所芸能部が録音した山口鶯流の小舞謡と江戸時代の狂言台本を比較して、小舞謡がどのように変化しているかを分析した。明治8年生

まれの田口光三を中心とした音源と、山口鷺流保存会が所蔵する江山本などの台本を比較検討して、録音された謡いと台本の譜がほぼ一致することから、鷺流の芸系が正しく伝承されていることを確認し、それが、次世代になると中央とは異なる謡い方にかわり、独自の方向へ転換する様相を検証する。音源が研究資料として有用であることを示した論文と言えよう。

問狂言に関する論文が一点。田崎未知「問語り考―能(三山)における問狂言の役割―」(『愛知淑徳大学国語国文』36。

3月)は、(三山)の和泉流二本・大蔵流一本・鷺流三本の問狂言台本を比較して、その位相を考察した。『狂言集成』所収本が仙寛の万葉学説を踏まえることなどを指摘するが、問狂言の機能が、能の筋と本説や典拠との橋渡しをするものであるという説明が不十分なために、論旨が不明瞭な印象をうける。

地方に伝承する狂言に関する論文が二点。山本晶子「馬瀬狂言資料の紹介(7)―馬瀬における「船渡簪」の変遷―」(『学苑・日本文学紀要』867、1月)は、伊勢地方に残る馬瀬狂言の研究である。馬瀬狂言保存会に蔵される文化八年書写の「船渡簪」の位置づけを和泉流の諸本と比較検討し、さらに現在上演される形への変遷について考証したものである。馬瀬狂言の「船渡簪」は文化八年本、現行本ともに、江戸中期から後期にかけての和泉流の台本と共通する箇所が多いと考証し、また、現行本は場面の省略化や台詞の簡略化が認められるも

の、文化八年本の展開を基にした台本とする。山本氏の馬瀬狂言研究の一部になるが、全体における文化八年本の位置づけもはっきりした。

村上美登志「和久里融通大念佛狂言」攷―「餓鬼角力」の地蔵菩薩と閻魔大王―(『論究日本文学』99、12月)は、小浜市に伝承する「和久里融通大念佛狂言」の上演曲目「餓鬼角力」に登場する地蔵菩薩と閻魔大王について説話的な考察を加え、宗教劇として形成される背景を探ったもの。

最後に台本の翻刻をあげよう。西村聡「金沢大学本狂言集―翻刻と解題―」(『金沢大学歴史言語文化学系論集(言語・文学篇)』5、3月)は、金沢大学に所蔵される江戸後期の大蔵流台本を紹介して諸本における位置づけをはかり、内山弘「『狂言下尽』―翻刻と解説―」(『国語国文薩摩路』57、3月)は架蔵の江戸末から明治初年の鷺流の台本を翻刻紹介して表記上の特徴について論じている。両資料とも今後の詳しい考察を期待したい。その他に翻刻資料として、狂言研究会―山下茜・久富木原玲・名倉ミサ子・小谷成子・野崎典子・加藤華「『文久写本狂言集』(愛知県立大学附属図書館蔵「翻刻」)『あいち国文』7、9月)、飯塚恵理人「佐藤友彦師所蔵九冊本問狂言「末社協能九下」」(『椋山女学園大学研究論集(人文科学篇)』44、3月)、があつたことを加えておく。(以上、小林)

坂口至「狂言ことばの変遷―その諸相と要因―」(『国語国文学研究』(熊本大学)48)は、天正狂言本から現行までの狂言

を、音韻(ワル、ト入声)、敬語語彙(オヂヤル/オリヤル、セラルル/サシヤル)、形態論(サ行イ音便)などの観点から時代・流儀による要約を行ったもので、亀井孝(1944)「狂言のことは」が呈示した、狂言は必ずしも特定の時代の口語の反映ではなく、「復古的な修復」による人為的な言語体系である事を再確認している。小林賢次、大倉浩などの先行研究が、全く引用されない。

米田達郎「江戸時代中後期狂言詞章の終助詞トモについて——驚流狂言詞章保教本を中心に」(『国語と国文学』90-10)は、驚流保教本に見える終助詞トモ(見ぬ事は有るまいぞ)「中々見ませうトモ」が、ロドリゲス日本文典(1604)以降では初出である事を示し、当時の口語の受容と想定した上で、保守的で伝承が固定化する面が強調される狂言の言葉に、別の視点を提案するもの。

小林千草(『翻狂言台本の翻刻と考察』(成城本「鏡男」と「鬼瓦」の場合)、『湘南文学』(東海大学)47)、「(翻)狂言台本の翻刻と考察」(成城本「柿山伏」の場合)、『東海大学日本語・日本文学研究と注釈』3)、「成城大学図書館蔵狂言「骨皮」「墨塗」の性格と表現」(『近代語研究』17)は、成城大学所蔵の幕末期狂言台本に基づく一連の翻刻・研究の最初のものであり、この後に「武悪」の総索引も添えて、小林千草(2016)『幕末期狂言台本の総合的研究 大蔵流台本編』(清文堂)として一書にまとめられて、参照に便利になった。著者には、他に『謡抄』に関する一連の論考が(こ

ちらも様々な媒体に分散されて)あり、これも一書と成る日が待たれる。(以上豊島)

### 【外国語による能楽研究】

◎単行本

Smethurst, Mae J. *Dramatic Action in Greek Tragedy and Noh: Reading with and beyond Aristotle*. Iaham: Lexington Books, 2013. (メイ・J・スメサースト『ギリシヤ悲劇と能における「劇展開」——アリストテレスを手引きに、またそれを超えて』)

著者によるギリシヤ悲劇と能の比較研究書として、三冊目にあたる本書は、ギリシヤ悲劇(ソポクレーズ『ピロクテータース』とエウリピデス作品と、現在能「俊寛」を比較分析する。多くの類似点をもつ両者が決定的に異なるのが、主人公にとって最も悲劇的な瞬間の描き方である——能においては三人称の使用によって「役者と役柄の遠隔化」が生じるのに対し、ギリシヤ悲劇においては一人称単数「われ」が頻出して役者が「徹底的に役柄の人物像に入り込む」という指摘が、とりわけ示唆に富む。

Tyler, Royall. *To Hallow Genji: A Tribute to Noh*. Charleston: CreateSpace, 2013. (ロイヤル・タイラー『源氏をあげて…能への捧げもの』)

謡曲翻訳の第一人者による新たな謡曲英訳集であり、多く

の番外曲を含む。十八曲の謡曲訳(阿古屋松)布留)松浦佐用姫(多田津左衛門)玄上)箱崎)檜垣)国栖)難波)錦木)野守)佐保山)等願暮頭)融)経正)鷗羽)源氏供養)船橋)、最初の四曲は世阿弥自筆本に基づくと、能に関する論説四点が所収されている。

### ◎論文

○Pinnington, Noel J. "The Early History of the Noh Play: Literacy, Authorship, and Scriptedness." *Monumenta Nipponica* 68, 2: 163-206. (ノエル・J・ピンニングトン「能の初期の歴史: 識字、作者意識、書かれるということ」)

世阿弥以前に口頭で伝えられ作成されてきた能の台本が、「書かれる」ようになることで、能にどのような変化が生じたかを論じる。当時の能役者の識字状況の変化、世阿弥書から垣間見られる作能環境などを考慮しつつ、台本が「書かれる」ことで知識人の能作への関与が助長され、能作品自体が変化していき、作者意識が形成されていく過程を追う。

○Reider, Norito T. "Tsuchigumo sōshi: The Emergence of a Shape-Shifting Killer Female Spider." *Asian Ethnology* 72.1: 55-83. (ノリコ・T・ライダー「土蜘蛛草子: 変化する殺人女蜘蛛の発現」)

能(土蜘蛛)の本説としては日本書紀や平家物語がひかれることが多い。本論文はそれらに加え、女性に変化した土蜘蛛が退治される「土蜘蛛草紙絵巻」(十四世紀初頭)が能作品に

あたえた影響を指摘し、前場冒頭の侍女「胡蝶」が土蜘蛛の变化した姿であるという解釈を提示する。

○ウィリアム・ペトルシヤック、飯塚恵理人「狂言「腰折」を英訳する」『名古屋芸能文化』一三三号、一五八―一六八頁。作品解説(日本語)および留学生に対して解説する際に注意すべきポイント(英語)を添えた、狂言「腰折」の英訳。

○Moore, Katrina L. "Transforming Identities through Dance: Amateur Noh Performers' Immersion in Leisure." *Japanese Studies* 33.3: 263-277. (カトリナ・L・ムーア「舞を通じたアイデンティティの変化: 能の素人実践者たちの余暇への没頭」)

「能の世界」の数多い構成員でありつつも、従来の研究から漏れてきた「能の女性素人弟子」たちに対して民族誌学的調査を実施し、稽古が彼らにもたらす新たなアイデンティティ形成を明らかにする。

○Kawai Nobuyuki, Miyata Hiroimitsu, Nishimura Ritsuko, and Okanoya Kazuo. "Shadows Alter Facial Expressions of Noh Masks." *PLoS ONE* 8.8. (川合伸幸、宮田裕光、西村律子、岡ノ谷一夫「影が能面の表情を変えろ」)

四種の能面の映像に人工的に「上向き」の場合の、あるいは「下向き」の場合の影を付けるだけで、その表情が「喜び」あるいは「哀しみ」の表情を帯びると被験者に感じられる。この実験結果から、「影」が能面の表情形成に大きく影響していると論じる。

○Oshita Masaki, Seki Takeshi, Yamamaka Reiko, Nakatsutka Yukiko, and Iwatsuki Masami. "Easy-to-use Authoring System for Noh (Japanese Traditional) Dance Animation and Its Evaluation." *The Visual Computer* 29.10: 1077-1091. (尾下真樹舞のアニメーション制作システム開発と査定)

アニメーション制作の専門知識のない能の研究者などにも使用可能であることを目的とした、仕舞のCGアニメーション制作システム開発を紹介する。さらにこのシステムを用いて作られたいくつかの仕舞アニメーションと実際の映像の比較や素人弟子による試用結果などを通じて、このシステムの有効性と改善点をまとめる。「能研究者が型付をもとに仕舞アニメーションを20分で制作できる」システム開発は、文理融合によってこそ成し遂げ得た成果だろう。

○Pellecchia, Diego. "Ezra Pound and the Politics of Noh Film." *Philological Quarterly* 92.4: 499-516. (ディエゴ・ペレッキア「エズラ・パウンドと能映画の政治学」)

日米開戦前夜、「アメリカは日本にGRAM諸島を譲り、代わりに日本は学校教育のための能の映像作品300タイトルをアメリカに送る」という和平提案を本気でしていたのが、エズラ・パウンドだった。(葵上「映像(一九三五年作成)の鑑賞をターニングポイントとして、パウンドがいかに「能の映像作品」がもつ文化的・倫理的教育効果を確信し、その普及に努めようとしたかを詳細に論じる本論文は、初期の、文学的影

響のみに焦点が当てられがちなパウンドの能受容研究に一石を投じるものである。

○Halebsky, Judith. "Constellation Translation: A Canadian Noh Play." *Theatre Research in Canada* 34.1: 56-73. (ジュディス・ハレブスキー「星座的翻訳：カナダの能」)

第二次世界大戦中、カナダの日系移民は強制収容所に収監された。二〇〇六年、バンクーバーのパンゲア・アーツ劇団が上演した戯曲『鴉』は、「この移民たちの経験(トラウマと喪失感、世代間の断絶と和解)を夢幻能という形で取り上げる。詩人ダフネ・マーレットによる脚本は、ハイディ・シユベヒトとリチャード・エマート、喜多流シテ方の松井彬の協力のもとに演出され、カナダの役者と東京からの能役者を交えて上演された。本論はマーレットの脚本が、能とカナダの文化社会が交わる点を柔軟にとらえる「星座的翻訳」によって成功をおさめた、と論じる。同公演を取り上げて、パンゲア・アーツ劇団の活動もあわせて詳細に紹介する別論文が、Waisvitz, Sarah, and Brenda Carr Velino. "The Steveston Noh Project: "The Gull" as Intercultural Redress Theatre." *Canadian Literature* 216: 118-137. (セアラ・ワイシユベヒツ「ブレندا・カー・ヴェッリノー「ステイーヴストン能プロジェクト」：異文化間矯正劇場としての『鴉』」である。

○Takiguchi Ken. "Translating Canons: Shakespeare on the Noh Stage." *Shakespeare* 9.4: 448-461. (滝口健「正典の翻訳：能舞台の上のシェイクスピア」)

「りゅーとびあ能楽堂シェイクスピアシリーズ」の一環である栗田芳宏演出「リア王——影法師——」を取り上げる。同じく能の技法を駆使してシェイクスピア劇を翻案する宮城聡演出「ク・ナウカで夢幻能なオセロー」との比較や、「アジアにおけるシェイクスピア上演アーカイブ」(Asian Shakespeare Intercultural Archive, AISA)での台本英訳作業の考察を通じて、シェイクスピアと能という二つの異なる「正典」を一つの作品にまとめる際の多様な可能性を考察する。

(竹内)